

## Y3-11

### 当院におけるRST運営における現況と課題

高山赤十字病院 救命センター

○長瀬 太規、西尾 優、今井 努、芳野 圭介、  
宮田 雅史、菅沼 智己、伊賀 真実、小邑 昌久

近年、チーム医療の重要性が高まり院内の各種活動においても多職種がチームを形成しひとつの方向性をもって医療の質の向上を目指すようになってきた。その流れは呼吸療法分野においても顕著でRespiratory Support Team (以下RST)の活動も全国的に広がりにつつある。飛騨地区の重症患者を受け入れている当院は地域における最後の砦であり、この地域の呼吸器管理を要する患者のほとんどが当院に入院している。その当院において2009年7月よりRSTを発足させ活動してきた。当院のRSTの活動内容は1.標準となる呼吸療法の提唱 2.適切な機材の使用と物品管理 3.RSTメンバーによる回診 4.院内スタッフの呼吸療法の教育とメンバーのレベルアップ学習 5.主治医からのRSTへのコンサルテーション 6.在宅のための地域連携と定義し、それぞれの小グループを形成し行動計画の立案やそれらの実行を行っている。発足より1年が経過しRST全体やそれぞれの小グループ内での課題が徐々に明らかになってきた。2009年の立ち上げ当初から現在までの活動の状況と課題につき検討し報告する。

## Y3-12

### 当院RSTによる人工呼吸管理ラウンドの取り組み

石巻赤十字病院 呼吸サポートチーム

○高橋 純子、熊谷 一治、小林 誠一、矢内 勝

【はじめに】当院では2007年にRST活動を、コンサルテーションとスタッフ教育を中心に開始した。今年1月より全ての人工呼吸器装着患者の定期ラウンドに取り組んだので報告する。

【目的】当院の人工呼吸管理の実態を患者データから把握し、今後の課題を抽出する。

【方法】2010年1月～5月までの人工呼吸器装着患者（装着時間24時間以内は除外）108例を対象とし、侵襲的陽圧人工呼吸（IPPV）と非侵襲的陽圧人工呼吸（NPPV）の2群において原疾患・期間・生存率・離脱率・RST介入率を集計する。

【結果】IPPV68% NPPV32%であった。原疾患の内訳は、IPPVがCPA蘇生後・脳血管疾患・消化器術後・心疾患術後と続いた。NPPVは心不全・慢性呼吸器疾患が大半を占めた。装着期間は、IPPVが7日以内44%、29日以上10%、NPPVが7日以内65%、29日以上3%であった。生存率は、IPPV63%、NPPV80%であった。離脱率は、IPPV58%、NPPV69%であった。RST介入率は、IPPV66%、NPPV37%であった。

長期化したIPPVは、原疾患のコントロールが不良で全身状態が悪いため、離脱困難である事例が多かった。しかし、呼吸筋力低下や胸郭の硬縮など廃用が原因で長期化した事例では、RSTが介入することで呼吸リハビリの治療計画が示され、離脱につながったものもあった。また、NPPVからIPPVへの移行はほとんどなかった。

【考察】早期のNPPV管理は有効であった。数年前からRSTで取り組んできたNPPVのスタッフ教育の効果であると考えられる。廃用症候群が原因となって長期化するIPPV患者への呼吸リハビリの実施は一定の効果を上げているが、今後は、より早期からの介入を推進するための教育が必要である。

RSTの介入効果は、今後詳細なデータ分析を加え評価していく必要がある。

【結論】当院ではNPPVの成功率が高いことが分かった。RSTのこれまでの教育の効果と今後の課題が明確になった。

## Y3-13

### 当院RSTの呼吸ケアチーム加算取得に対する取り組み

名古屋第一赤十字病院 臨床工学技術課<sup>1)</sup>、

名古屋第一赤十字病院 呼吸器内科<sup>2)</sup>

○山鹿 彰<sup>1)</sup>、野村 史郎<sup>2)</sup>、服部 敏之<sup>1)</sup>

【呼吸器管理チーム(RST)について】当施設RSTは、院内医療安全推進委員会の下部組織として2006年5月に発足し、医師・看護師を対象とする人工呼吸器取り扱いに関する勉強会の開催（毎年2回）・毎週一回の人工呼吸器使用患者に関する病棟回診または意見交換会・月一回の連絡協議会を開催している。

【呼吸ケアチーム加算】平成22年度診療報酬改定に、施設基準を満たす呼吸ケアチームに加算（週1回）150点が記載されている。活動の際には診療計画書を作成し、診療を行った患者数や治療の回数および人工呼吸器離脱に至った患者数、患者一人当たりの平均人工呼吸器装着日数などについて記録し、2年間の保管が必要とされる。我々はこの診療報酬加算に対し、院内の病院総合情報システムポータル（院内ポータル）にファイルメーカー Pro 9.0を用いて人工呼吸器使用患者に関するデータファイルを作成し、RST診療計画書を院内電子カルテ上に添付する形式を構築した。なお、RST活動後に医事入院業務担当者との連携により電子カルテ参照後入院料加算請求を行うこととした。

【考察】呼吸ケアチームに関する加算は、今回新に認められた診療報酬であり、RST活動から入院料加算までの流れを明確にし、活動内容など詳細する記録を2年間保管する必要がある。この問題に対し、我々は院内ポータルのアプリケーションを使用・電子カルテへの添付により医事入院業務担当者との連携が容易となり、ペーパーレスにて記録の長期保管が可能となり、様々な問題を解消すると考える。

【結語】平成22年度診療報酬改定に、施設基準を満たす呼吸ケアチームに入院加算（週1回）が可能となった。当施設RSTは、院内ポータルを使用してペーパーレスにて記録の長期保管を可能として活動している。

## Y3-14

### 東海呼吸療法サポートチームの新人看護師「酸素療法」教育ツールを使用して

名古屋第一赤十字病院 人工呼吸器管理チーム

○秋江 百合子、渡邊 美佐子、野村 史郎

【はじめに】自施設は、852床の急性期病院で常時約40台の人工呼吸器が稼働している。一般病棟では、人工呼吸器によるインシデント・アクシデントレポートが増加傾向にあり、医療安全推進室の提案で平成18年度から人工呼吸器管理チーム（RST）が発足した。活動内容は、人工呼吸管理の教育・助言・実践・保守管理を目的としている。その後、東海地区の呼吸療法サポートチームの有志により東海呼吸療法サポートチーム協力会（東海RST協力会）が結成され、当院のRSTも参加し、他施設との情報交換や教育講演なども実施している。今回、東海RST協力会から酸素療法についての新人看護師（新人）対象の教育資料が提示された。今回、新人と研修に参加した2年目以上の看護師にも実施した研修結果を報告する。

【目的】1.東海RSTが作成した講義用スライドと資料を基に酸素療法勉強会を実施する 2.酸素療法の知識の理解度を把握し、今後の活動課題を明確にする

【方法】1.酸素療法の筆記試験（15分）2.筆記試験後に講義（45分）3.試験結果を分析し、人工呼吸器管理チームの今後の課題を検討する

【対象者】新人 66人、2年目22人、3年目4人、4年目4人、5年目以上3人 合計99人

【結果・考察】問題別では、酸素運搬については正解率100%であった。医療用中央ガス配管については3年目以上が100%の正解率であった。酸素ポンベの残量表示は15.4%と低値であった。経験年数別の平均正解率は、新人49.3%、2年目51.7%、3年目58.3%、4年目54.2%、5年目以上52.5%であった。経験年数が上がるにつれて正解率が優位に上昇するわけではなかった。当院では新人だけでなく、それ以上の看護師に対しても酸素療法の教育が必要である。

【結語】新人の知識向上のための酸素療法勉強会であったが、2年目以上にも再教育が必要と考える。